

朗読劇【ゴニスイッチ！】

「わたしと世界をつないだ一つのバッグの物語」

※朗読劇ゆえ、基本的には、本を持ったままだが、

時々、立ちあがって動いて演技をしたり、台本を離したりして掛け合いするシーンもある

【登場人物】

バック ユウコにもらわれたバック。フィリピン産。ユウコを小馬鹿にもするが

その成長を優しく見守っている意外といいやつ。

ユウコ（16） おてんばで勉強が嫌いな女子高生。セイジの事が好き。いつもうるさいが恋愛になると奥手になる。

セイジ（16） 日本人の父とフィリピン人の母から生まれたハーフ。セイジの半分は、「優しさ」で出来ている。人の痛みがわかる優しさ。

マミ（16） 「真実」と書いてマミは嘘が大嫌い。ユウコと真逆の優等生。ダメなユウコをほっとけない母性本能もある。

テラシ（28） 寺島という地理の先生。人間味溢れる分、生徒との距離が近いが、先生方からは示しがつかないとあまりいい評判ではない。自由奔放で世界を旅するのが好き。普段は適当そうに見えるが意外と先生らしい一面もある。

舞台上の真ん中にフェアトレードバックが置かれている。

それを囲むように五つの椅子があり、それぞれ五人の役者が座っている。

バック「誰が何といおうと僕はバックである。最初にそれだけは予め言っておこう。「えー、バックがどうしてしゃべるの？うそー」なんて言う子がもしいたら僕はそういう子の聞く耳を持たない。パンに耳はあるけど、バックには耳がない。代わりに、ほら、バックには口があるんだ。僕だけじゃない。よく見れば世の中でひっそりと静まり返っている商品たちには耳や口や、口ほどにモノを言う目が見開いて（観客に向け）君たちを観察しているってわけ。」

ユウコ「何このバック、かわいい〜」

バック「なんて僕の事を時々気に入ってくれる子もいる。高校二年生のユウコもその一人だもちろんその時僕をプレゼントした相手がユウコの好きなセイジだったから、いつもの1・5倍増しでボクがかわいく映ったんだろう。だけどそれを差し引いても、ユウコは僕をかわいいと言ってくれた。」

ユウコ「いいの、私がもらって！」

セイジ「先週旅行行ってさ、それのお土産。ま、もしよかったらでいいけど」

ユウコ「超かわいい！セイジ、ありがと！」

バック「セイジというのは、ハーフだった。ハーフって言っても、埼玉県の父と東京都の母親を持つユウコのようなハーフじゃない。お母さんが外人さんなんだ。そのせいか、グローバルな視点で誰にでも、こんなおてんばなユウコにも優しい。夏の終わりに死んだ蟬をそっと土の中に埋めてやる程セイジは優しい子なんだ」

ユウコ「ね！見て、مامミ！かわいくない、このバック！？」

مامミ「どうしたの、そのバック！？どっから盗んだの？」

ユウコ「盗んでませんけど！」

مامミ「いや、だってユウコが買うような柄じゃないでしょ、それ！」

ユウコ「ふふふ。なんでこんなバック持つてるか聞きたい？」

مامミ「聞きたいっていうか、聞いて欲しいんでしょ？」

ユウコ「そ。実はね、セイジくんにプレゼントしてもらっちゃいましたあ！」

مامミ「えー、うそー。それはひよっとしてあれなんじゃないの！」

ユウコ「だよね！」

مامミ「大切にしなよ！絶対になくしたらダメだよ」

ユウコ「無くす訳ないよ！完璧大切に！毎日手入れする！このバックとあう服もコーディネートするんだあ」

バック「とユウコがママに約束した一週間後、僕はあっさりと行方不明になった。なんとなくユウコの部屋は尋常じゃなく汚い。脱ぎかけの靴下の上に食べかけのポテチがあり、その隣に恋愛特集が載ってる雑誌が放置され、その横に溜まりに溜まった宿題が放置されているほどの汚さだった。はじめの頃こそ、ユウコは鏡の前でボクを持ったりして、服とあわせたりしてくれたんだ。セイジとどこかへ行く時、必ずこのバックを持って行こうって。そう思ってるうちに3日たち、4日たち、1週間もする頃には、どこかの何かの下に僕は埋もれてしまった。そしてやがて時は来た。僕を持ち運んでくれる時が。それはある日の放課後――」

舞台上座っていたユウコと、セイジ立ち上がる

(次の場面のスタンバイ)

立ち上がるユウコ

バック「バスケの練習をしてるセイジとの約束から始まった」

バスケゴールに向かいスリーポイントシュートの練習するセイジ

ゴールに入る。パチパチと拍手するのは、ユウコ

セイジ振り向く

ユウコ「ナイシュー！すごいねえ」

セイジ「はは、すごいよ」

ユウコ「一人で居残り練習？」

セイジ「試合近いからね。今度こそ絶対レギュラーとらないと」

ユウコ「い、いっただっけ試合」

セイジ「今週の日曜」

ユウコ「今週の日曜かあー、そっかー応援とか言ったら燃えるんだろうなあ。そっかー」

セイジ「え、来てくれるの？」

ユウコ「え、ちょっと待って、応援？いやーけど、私結構、ビジーだからなー(手帳を見て)

あっちゃー、今週の日曜かあ」

セイジ「あ、無理なら無理で」

ユウコ「うわー偶然スッカスカだあ！しいて言うなら一人カラオケ一日中入れようかどうかどうしようか迷ってたぐらいだあ」

セイジ「じゃ来てよ。一人カラオケの予定いれなければ」

ユウコ「え？いいの!？」

セイジ「来てくれるなら」

ユウコ「え、そうだな、じゃ偶然お弁当の材料買っちゃったから作っちゃおうっかな、セイジにもらったバックに詰めて。ね、こんぐらいのお弁当（両手いっぱいのリアクション）ね」
セイジ「でかすぎでしょ、それ」

二人、笑う

バック「ユウコの作戦は成功した。セイジに誘われる事を密かに狙っていたのだ。それから下校したユウコは、にやけた顔がおさまらないままだった。僕の中にお弁当を詰め、て応援に駆けつけ、セイジと一緒にお弁当を食べる姿が何度も旋回していたようだ。家に帰っても、あの子頭大丈夫かしらと思われるほど終始ニヤニヤしていた顔のユウコだったが、やがてそのにやけ顔は部屋に入ってから無くなっていった。」

ユウコ「あれ？ない！ないよ！あのバッグどうしたっけかなーたしかこのあたりに置いたはず……。あれ。こっちだったかな？あ、やっぱあの服の下？あっちのタンス？まづい、これはまづい……。まづい！（電話をかける仕草）」

プルルルプルルル

マミ「もしもし、何よ、ユウコ、今お風呂入るとこなんだけど」

バック「困った時は、マミだのみ。ユウコのお決まりのパターンだ」

ユウコ「マミ、大変！ない！ないよ！」

マミ「ないないうるさいな、何がないの！脳みそ？」

ユウコ「そう、脳みそがないの、だから授業もちんぷんかんぷん……。って、うっさいよ！そんなことあるけど、そんなことじゃないの！」

マミ「じゃ何がないのよ」

ユウコ「バックよ、バック。派手なやつ、セイジにもらった」

マミ「え、まさか。無くしたの？あんた最低だよ。セイジ泣くよ、バックも泣いてるよ」

バック「そのとおり、僕はもう泣いてる」

マミ「あんた部屋が汚すぎなのよ、嵐が訪れたみたいだもん」

ユウコ「じゃ部屋に嵐が訪れた事にしていいかな？」

マミ「正直にいいなよ、セイジに」

ユウコ「泥棒に入られた事にしていいかな！」

マミ「正直に言いなつて、真実を。」

ユウコ「そんな事正直に言えるわけないでしょ！もし何か聞かれたら話合わせて。ね」

マミ「ダメよ、それは！私、嘘が付けられないもの、私さ、真実って書いてマミっていうのよ。ね、だから正直に言おう！無くしましたって！泥棒は入ってないけど度肝を抜くほど汚い部屋

で、バックを無くしましたって。ね！」
ユウコ「それが出来たらマミに相談してないでしょ、ね、どうしよう、何かいい知恵ない？」
マミ「もううう。じゃもう一個同じもの買えばいいんじゃないの？」
ユウコ「あ！それだ！あんた、頭いい！天才！やっぱ困った時のマミだのみだね。ありがとう。じゃあね」

バック「親友のマミは、余計な知恵を貸した。そのせいで、マミは僕じゃなくて僕と同じ仲間を買おうと言う作戦に出た。次の日の放課後、僕のルーツを探るためユーコはセイジに聞き込み調査をした」

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン

ユウコ 「ねえセイジくん。」

セイジ 「おう」

ユウコ 「ごめん、部活行く途中に呼び止めて、ちょっとだけいい？」

セイジ 「ちょっとならね」

ユウコ 「あのさ、この前くれたバックなんだけどさー。」

セイジ 「あ、うん」

ユウコ 「あれってさ、どこで買ってきてくれたの？なんか旅行のお土産だって言ってたよね？」

セイジ 「あー、フィリピンね」

ユウコ 「え、フィリピン？・・・へえ・・・そうなんだ」

バック 「ユウコはすました顔でそう答えた。が内心こう叫びたかったようだ」

ユウコ フィリピンって、簡単に買いにいけないよねええええ！

セイジ 「え、なんでそんな事聞くの？」

ユウコ 「あ、えっと、それは」

セイジ 「なんかあのバック、問題あった？」

ユウコ 「え、ないよ、ないない。」

セイジ 「無くしちゃったとか？」

ユウコ 「無くしてない無くしてない無くしてない！（ひげを剃った真似して）切レテナーイ！。いやいやいや、ほらかわいいからさ、もっと集めたいなーみたいなさ。」

セイジ 「ほんと？来月またフィリピン行くからさ、したらまたお土産で買ってくるよ」

ユウコ 「あ、そっかそっかお母さんの実家フィリピンだって言ってたもんね、そっかあ、フィリピンかあ」。

セイジ 「フィリピンって言われてもあんまピンとこないでしょ？」

ユウコ「まあね、ま、なんかあんまりイメージ湧かないけど、フィリピンってなんか響きがか

わいいよね？ほらなんかフィリピンってフィリットとして、ピン！っとしちやったりして。」

バック 「ユウコは、てんぱると時々わけのわからない事を言う」

セイジ 「一度行つてみてよ。意外と近いよ。海は青いし、空は高いし、食べ物だっておいしいし！ マンゴーのうまい島が見えたりしてさ。いつまで遊んでてもだれも「勉強しろ」なんていわないし。」

ユウコ 「わ！それ最高！それだけでフィリピン最高！」

セイジ 「母さんの実家の前にはバスケットもあってさ、夜は夜で、家族はもちろん親戚や近所の人がいっのまにか集まってきたて、そこでバスケットし放題。近くにはバナナとココナツもなつたりして、マンゴーとかバナナとかフルーツ食べ放題！」

ユウコ 「そっか、じゃフルーツバスケットし放題だね！」

バック 「ユウコはてんぱるとわけのわからない事を言う」

声 「おい、セイジ、何やってんだ、早く行くぞ」

セイジ 「今行く。ごめん、じゃ部活行くね。」

ユウコ 「頑張ってる」

バック 「結局、僕の仲間を見つけると作戦も失敗に終わった。ざまあみろだ。セイジのお母さんはフィリピンに仕事に来ていたセイジのお父さんと出会って運命的な恋に落ちちゃった日本人のお父さんのところへはるばる海を越えてお嫁さんに来たんだ。ハーフってかっこよく見えるけど、それなりに大変な事もあるようだ」



テラシ 「おい、いいじま。そんなとこにうずくまってわっかりやすい落ち込み方だな。」

ユウコ 「え？」

テラシ 「あ！おまえ、まさか・・・食べ過ぎで具合悪いんだろ？！なんでもかんでも食うからだよ。どこで拾い食いしたんだ。」

ユウコ 「ちがいます！デリカシーない発言やめてください。私にだって、いろいろと悩みつつもんがあるんです！」

バック 「そんなデリカシーのデの字もない発言をしながらユウコに近寄ってきたのは、ちょっと変わり者の地理の先生、寺島だ。その時、偶然寺島先生が口にしてたジュースに、ユウコは食いついた」

ユウコ 「寺島先生！」

テラシ 「何だよ、でかい声出して。廊下じゃ大声禁止。駆け足禁止」

ユウコ 「そ、そのジュース！」

テラシ 「なんだ、飲みたいのか？」

ユウコ 「こ、こ、これどこで！？」

バック「ユウコがそのジュースに食いついたのは、そのデザインが僕の一部と同じデザインをしていたからだ」

テラシ「フィリピンの知り合いにもらったんだよ。飲みたいならほれ。関節キスになるけど」

ユウコ「飲みたいんじゃないやなくて！こ、このデザイン、なんで？・日本でも売ってるの？売ってるっていうか、なんでこれジュースパックなの！」

テラシ「何を言ってるんだよ、お前は」

ユウコ「ちよつと借りるね、このジュース。ばいばーい」

テラシ「やっぱり関節キスするつもりだな。おい！おませさん！」

バック「ユウコはそれから家に戻って、ネットで検索を始めた。」

カタカタカタカタ

ユウコ「（検索入力している動き）【フィリピン】、【ジュース】っと」

バック「このジュースパックとフィリピンの関係、そして僕との関係を探ろうとしたのだ。

ユウコにしては、珍しくいい選択だ」

ユウコ「あ、フィリピンってセブ島がある国かあ。そういえばママがセブ島行きたいわつて言ってたあ。ヒロットマッサージでお肌もツルツルよ、なんて。わ！、何この海！超きれいな！めっちゃ泳ぎたい、セイジくん！これ、ちよつと水着検索しよ！あ、いやいやいや、でもいきなり一緒に海は恥ずかしいか、あー悩むうう」

バック「ユウコはすぐに脱線する。僕を探す事もどうぞお忘れなく」

ユウコ「うわー、バナナ畑これ。でつか。そういやフィリピン産多いもんね、バナナって。えけどなんで子供ばっか働いてるの？【バナナ作りの現場ではまだまだ児童労働が問題になっていきます】?!?学校通わず働いてるの？しかもなにこれ、農薬？すごい大量に・・・こんな農薬まみれんとこで子供が働いてるの？そんなバナナだよ、親はどうした、親は？・・・てか、あれ、何ネットで検索してたんだっけ!?!あ、そうだ、このジュースパックだ」

バック「とか言いながらまた脱線するユウコが、僕とジュースパックの関係性によりやく辿り着いたのは、脱線しまくった五時間後の事だった」

ユウコ「あ、あつた、このジュースパックと一緒だ!・・・え・・・ゴミ?・・・あのバック・・・ジュースパックのゴミで出来たバックだったの・・・そんなものセイジくんはプレゼントしてくれたんだ・・・はは。なんか、あれだね・・・変な期待しちゃったな。なんだ、ゴミだったのかあ・・・」

バック 「ユウコは、僕がジュースパックのゴミから生まれたものだと思って、急にしぼんだ風船のようになった。翌朝、セイジと顔を合わせた時も浮かぬ顔のままだった。」

●
がやがやと教室の声。おはよー、などと声が飛び交う

セイジ 「おはよ」

ユウコ 「・・・お、おはよ」

セイジ 「何だよ、具合悪いのか」

ユウコ 「別に」

セイジ 「何だよ、どうしたんだよ」

マミ 「おはよー」

ユウコ 「おはよう、マミ。ね、見て。これ見つかったの！ずっと借りてたCD。」

マミ 「うわー、なつかしー。え、何で今頃？」

ユウコ 「部屋漁ってたら出てきた。見た事もない虫とか出てきた」

マミ 「じゃバックも見つかったの？」

ユウコ 「え？」

マミ 「バックよ、セイジにもらった。」

ユウコ 「(わざとらしい咳払いをし) ゴホン。ちよつといい、マミ・・・」

セイジ 「バック無くしたの？」

ユウコ 「あ、何でもない何でも無い」

セイジ 「何でもなくないでしょ、え、無くしたの？」

ユウコ 「違う違う、部屋に嵐が訪れてね」

マミ 「え、セイジにまだ言っていなかったの！？ちゃんと本当の事言いなよ」

セイジ 「おい、ユウコ！どういう事だよ、無くしたって」

ユウコ 「無くしたっていいでしょ、どうせゴミなんだから！」

セイジ 「え・・・」

バック 「その発言で、みんなの空気が止まった。」

セイジ 「ご、ゴミって」

ユウコ 「ゴミでしょ、飲み終わったジュースパックのゴミで作ったバックでしょ？」

マミ 「ユウコ、そんな言い方」

ユウコ 「ゴミはゴミでしょ、どんな加工したってさ、カレー味のウンコと一緒によ！」

マミ 「ユウコ、なんていう例え話を」

セイジ 「そうだよ、ゴミだよ、悪いかよ！けど、「可愛い」って喜んでくれたろ」。

ユウコ 「そりゃあメイドインゴミだって知らなかったからよ。けどゴミって知っちゃったからもう無理！無理です！私、昔ね、カプトムシのメスだと思って大事に飼ってたのよ、そ

したらそれゴキブリだったの！私の気持ち今そういう感じ！わかる？」

セイジ「わかんないよ、けどゴミだつてタカラモノになる時だってあるんだよ！このバックが誰かの希望になってんだ！けどユウコには、ユウコには一生わかんないよ！」

ユウコ「……」

マミ「あ、セイジ！」

飛び出したセイジ、やがてストップモーション。役を解除して椅子へ。

バッグ 「ユウコはそれ以上言い返せなかった。いつも優しいセイジがそんな風に怒るのを初めて見たからだ。ユーコは、そのまま誰もいない放課後の教室で踞っていた。とりあえずユウコさん、早く僕を見つけてくださいませ。」

ユウコ、ひとり立ち尽くしたまま。

夕やけこやけの音楽。あるいは「下校の時刻になりました」などと放送

テラシ「もう下校のチャイムなつたら、いつまで校内にいるんだ？」

ユウコ「……」

テラシ「ジュース、飲むか？」

ユウコ、クビを横に振る

テラシ「なんていうか、思春期つてのはあれだなあ、泣いたり笑ったり。忙しいな」

バック「ユウコは、テラシの言葉に答えようとしなかった」

テラシ「そんなに嫌か、ゴミのバックが。俺は素敵だと思うけどなあ」

ユウコ「ぬ、盗み聞き！？」

テラシ「盗み聞きも何も聞こえるだろ。あんなでつかい声で喧嘩してたら、校長先生ずっこけて、ズラとれてたぞ」

ユウコ「校長先生に謝らなきゃ」

テラシ「校長はいいよ、ツルピカッとさせとけ。それよか、セイジだよ。あいつはお前に少しでもフィリピンの事知ってもらいたかったんだよ」

ユウコ「そんな事ないと思います」

テラシ「そんな事あるよ、俺思い出したんだよ。お前がバックの事でやいのやいの言ってたから、そーいや、セイジのやつ、進路相談の時に熱い事言ってたなって」

セイジ「（立ち上がり）先生、僕、将来フィリピンと日本の架け橋になる仕事に就きたいんですよ」

※以下、進路相談のセイジがちよいちよいフラッシュバック的に挿入。

テラシ「あいつ口数少なめだからあんまり何考えてるかわかんなかったけど、その時初めて思ったわけだよ、あ、こいつは意外に秘めた熱さを持つてるぞって」

回想のセイジ「先生、スモークーマウンテンって知ってますか？」

テラシ「セイジにバックもらったんだろ？それきつとき、スモークーマウンテンのジュースバックから生まれたもんだ」

ユウコ「スモークー・・・」

テラシ「知らねえか、スモークーマウンテン？」

ユウコ「カールスモークー石井さんしか」

テラシ「関係ないよ、スモークー石井さんは！フィリピンの山の事だよ。ゴミの山。フィリピンの人々はそのゴミの山に埋もれたタカラモノ探してんだよ」

ユウコ「タカラモノを？」

テラシ「都内でもゴミん中から雑誌とかお弁当とか拾ってるホームレスいるだろ？フィリピンでもさ、生活するため、生きるために拾ってんだよ、お金に換えられるものを」

回想のセイジ「先生、僕ね、こないだフィリピン行った時、そのスモークーマウンテンからジュースバック拾ってるジョアンって子と友達になったんですよ。僕と同じ年で僕と同じようにバスケット大好きで、けどそいつバスケットシューズも買わずに裸足でバスケットやって、足とかキズだらけなんですよ」

テラシ「(ユウコに)セイジはそのジョアンって子を裸足のライバルだと言ってた。もったいい環境にいたらもっとバスケットがうまくなれるのにな」

回想のセイジ「僕ジョアンに聞いたんですよ、将来の夢とかあるの？って。そしたら先生、ジョアンがどんな夢語ったと思います？試合に出たいとかプロバスケットの選手になりたいとかじゃないんですよ、【バスケットシューズ買いたい】ってそう言ったんですよ。僕それ聞いてなんか泣けてきちゃって。だってバスケットシューズなんて親にねだったら当たり前みたいに買ってもらえるじゃないですか。そんな当たり前の事が海の向こうの子にとっちゃ遠い遠い夢で。そんな遠くの夢のために今日もその子たちはスモークーマウンテンでタカラモノを探してるんですよ。」

テラシ「セイジは自分の境遇も教えてくれたよ。お前知らなかっただろうけど、あいつのおつかさん、フィリピンの方なんだよ、それで小学校の頃虐めにあっただけでもあんなにひどくて」

回想のセイジ「けどね、先生、そんなイジメにあつた事、屁みたいなもんだなって思ったんですよ。この年になって初めて母さんの生まれた国に行つてその子たちに出逢つて、そした

らすごい自分が小さい事に悩んでたなって。僕が学校行きたくない云々で悩んでた間、その子達、明日生きるか死ぬかでずつと彷徨ってんですよ」

テラシ「それからセイジは色々調べたらしい。フィリピンの労働者の現状を。ひたすら働いてるのに、どうして一向に生活が豊かにならないのかって。・・・」

回想のセイジ「結局、大企業が全部もうけを搾取してるんですよ。バナナとかの大農園も大資本が全部牛耳ってて、だからそこで働いてる人はそれに見合う賃金全然もらえないんですよ。おかしくないっすか？すんごい長時間働いて働いて、体が動かなくなるぐらい働いてそれでも一介の雇われ労働者はほんの一握りっすよ。」

テラシ「だけど大企業に歯向かったら、そのわずかな賃金すらもらえなくなる。そんな現状があることをセイジは嘆いてた」

回想のセイジ「だから現地の人の中には、農作業に見切りつけて都会に出たりするんですよでもそこでも仕事ないから、スモークーマウンテンあさって、その中でタカラモノ探してるんです。」

テラシ「そんな時、セイジはフェアトレードって存在を知ったんだ」

回想のセイジ「先生、前、社会の時間なんかで言っていましたよね、フェアトレードの話。僕授業じゃほぼ爆睡してましたけど、ようやくその現地行って意味わかったんですよ。フェアトレードやってる団体は、利益を搾取する大企業のやつらとは違いますよね、同じ現場で働いて一緒に生きてて、どうしたらもっと作る人たちの生活環境がよくなっていくかを必死で考えてて。しかも僕、寄付をするっていう形のボランティアじゃないってのがすごいいなっと思っただですよ。なんか寄付っていうと与えてあげてる、みたいな上から目線みたいな気がして。フェアトレードは、寄付じゃない。働いてくれた分、それに見合った対価を渡す。それでそのヒトたちもさらにやる気になるっていう、そういう考えがすてきだなと思って。」

ユウコ「フェアトレード・・・」

テラシ「だからセイジがお前にプレゼントしたのは、いわゆるフェアトレード商品の一つだよ。そりゃ今一般に出回ってるバックと比べたら高いと思うかもしれない。けどただ安いって事は恐ろしいぞ。俺らはそういうものに慣れ過ぎてるからな。スーパー行っただけであら安いわね。あら激安価格！って。けど安いって事は、その裏側で賃金を抑えられすぎて泣いてる人もいるってこった。俺たちは今の生活に慣れ過ぎて、その商品の向こう側が想像出来なくなっちゃった。フェアトレードってのはそれをもっかい見直そうって考えだ。だからお前がプレゼントしてもらったあの商品も、それに見合う賃金が現地の人に行き届く。あいつ言ってる、そのバックに「希望」が詰まってるって。」

回想のセイジ「先生、僕には見えるんですよ、このバックの向こうの現地の人々が」

テラシ「お前に見えるか、ユウコ。バックの向こう側が。ほんの少し想像するだけでいい。きつとその小さな事が大きく世界を変える。」

ユウコ「先生・・・」

○
バッグ 「ユーコは泣きそうだった。それは、意外と先生らしい事教えてくれたテラシにだったり、ちゃんとした将来を持っていたセイジにだったり、そんなセイジにひどい事を言った自分にだったり、色んな矛先に対する涙だった。そんな風に涙を堪えていたユーコがだめ押しを喰らったのは、自分の家に帰宅してすぐの事だった。」

マミ 「お帰り、ユウコ。」

ユウコ 「え！マミ来てたの？」

マミ 「あんたを待ってたんだよ、はい。」

ユウコ 「このバッグ、どこから？」

バッグ 「僕は、もう少しのところまで古新聞に紛れてゴミに出されるところだった。マミは、そんな僕を危機一髪で救ってくれた命の恩人だった。」

マミ 「ちゃんと管理しなよ。古新聞に紛れて捨てられそうになってたよお」

ユウコ 「良かった！ああ、よかったああ、ああああああん。（バッグを抱き潰す）」

バッグ 「ぐ、ぐるじい。」

マミ 「ユウコ、今度こそ絶対なくしちゃダメだよ。何度も何度も言ってるけど、もっと物を大切にしな。洋服だってバッグだって靴だって一緒。必ずその向こう側に作ってくれてる人がいるんだよ」

ユウコ 「それは想像力だよね。その人たちの事を少しでも想像してみる。それが世界を変えるかもしれないもんね」

マミ 「何どうしたの、気持ち悪い。誰の入れ知恵？」

ユウコ 「内緒。はー、けど良かったあ、バッグが見つかって。これでめでたしめでたし、じゃねえし！まだ一つ解決してないし！！」

マミ 「ちよつと何処行くの！？ユウコ！・・・たたくもううう。」

バッグ 「ユウコは走った。セイジの元へと走った」

ユウコ 「（全力で走ってる）セイジくん！に謝らなくちゃ。セイジくん！」

バッグ「その一心で走って走って走って走ってこけた。顔面強打した。膝小僧擦りむいた。犬のウンコを踏んづけた。それでもユウコはセイジの元に走った。ひび割れて崩壊しかかった二人の関係を修復するために・・・」

全力で走っていたユウコ、やがてセイジの元へ

ユウコ 「せ、セイジくん！」

セイジ 「わあ！ビックリしたあ。」

ユウコ 「はあ、はあ、セイジくん、あのね、私、はあ、はあ」

セイジ 「な、なんでそんな走ってきたの？なんかのマラソン大会？」

ユウコ 「はあ、はあ、そう、マラソンの大会に・・出ない出ない。私ね・・はあはあ」

セイジ 「大丈夫？深呼吸した方が」

ユウコ 「そう、酸素が足りないの！セイジ君っていう酸素が・・いや何言ってるんだろ私。いや、あの・・さつきは・・ごめんね、さつきこのバックがゴミだなんて言ってる。・・わたし・・何にも知らないくせに・・このバック、カレー味のウンコとか言うて」

セイジ 「ごめん。こっちこそ。」

ユウコ 「ううん、私が悪いんだもん、全面的にごめん。お詫びしたい本当。どうしたらいいお詫びの印？頭丸坊主にしたらいい？」

セイジ 「いいよ、丸坊主にしないで。その代わり」

ユウコ 「その代わり？」

セイジ 「今度の日曜、美味しいお弁当期待してます！」

ユウコ 「(泣きそうな声で) 期待されます！」

バック 「丸坊主になったユウコの姿を見てみたかったが、そこは優しいセイジ、許してくれたみたいだ。」

ユウコ 「あ！そうだ。セイジくんは来月春休み、フィリピンに行くって言ってたよね？」

セイジ 「お、おお。」

ユウコ 「今度はさ、わたしも一緒に行きたいな、フィリピン！」

セイジ 「え、マジ?!」

ユウコ 「うん!!!」

セイジ 「じゃ行こ。ひとりカラオケ出来る場所とかはないけど」

ユウコ 「カールスモーキー見に行きたい。」

セイジ 「カールスモーキー?え、石井さん？」

ユウコ 「いや、違うえつとなんだっけ?とにかく行きたいの！行きたい！」

バッグ セイジは笑ってくれた。セイジのその笑顔を見て、ユウコもまた笑顔になった。それだけでいいじゃないか。僕が古新聞と一緒に捨てられそうだったのも水に流そうじゃないか。それからその週の日曜日、バスケの大会が開かれ、ユウコもテラシもママも応援にかけつけた。朝早くから腕によりをかけたユウコの手作り弁当は大失敗に終わり、オリジン弁当で誤摩化したが、試合は大勝利だった。セイジはレギュラーとしてその試合に出て、ここの一番でスリーポイントを決め、チームの勝利をもたらしたのだ。セイジへの応援は観客席からだけでなく、海の向こうの裸足のライバルからも届いたのかもしれない。あ、それからこれは追伸だけど、ユウコの部屋が見違えるように綺麗になった。お母さん達はこういう風の吹き回し熱でもあるのかしら、なんて言ってたけど、ユウコがどうして変わったかはここ

だけの秘密にしておこう。だから僕は部屋の隅の隅の決められた定位置でいつも見守っている。ちよつとは「愛着」ってものがわかってきた、らしい。ユウコが学校に行く時には弁当入れにどっかでかける時はエコバッグにつっこき使われてる毎日だけど、それがなんだか心地いいんだ。